

日本古建築研究の栞 (第十一回)

工學博士 天 沼 俊 一

第二十一 鷓尾・鯨

根には皆乗つてゐたのであつた。材料は先づ次の三種であらう。

昔し大建築の屋根が四注か入母屋かの時、大棟の兩端にのせてあつた一種の形をしたもので、京都市内で一例を舉げると、平安神宮へ行つてみる

(一)金銅。東大寺大佛殿(創立當時)・西大寺彌勒金堂・工藝品では玉蟲厨子。

のが一番早い、其屋根には綠色の藥をかけた大きい立派なのが乗つてゐる、即ち後世の鯨の様なも

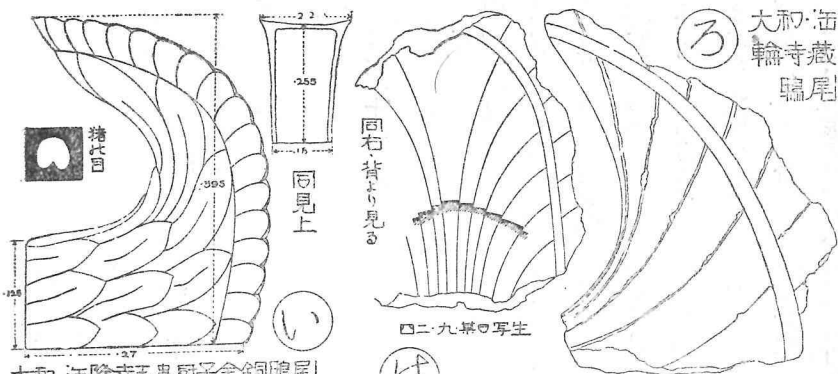
(二)瓦。唐招提寺金堂・法輪寺  
(三)石。百濟大寺

ので、あれが鷓尾である、字は鷓尾・蚩尾等ともかく、また沓の様な形をしてゐるので沓形くつかたともいふ。

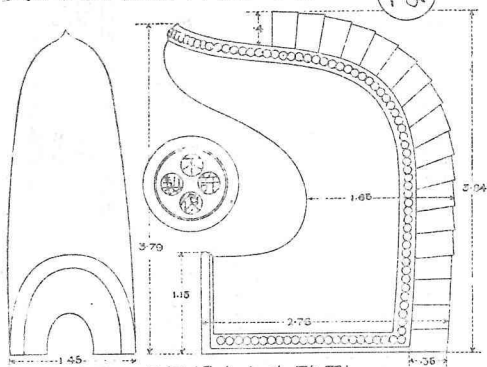
飛鳥・奈良時代の重要な建築は、大概其屋根は四注か入母屋かであつた、だから自然、夫れ等の屋

併しながら現物が残つてゐるのは、法輪寺の瓦製の破片(第七圖⑥)及び唐招提寺金堂大棟西側——向て左手——のもの(第七圖⑦)丈けで、玉蟲厨子のはつい近年迄一つ丈け寶藏に入れてあつたのを盗まれて種なしとなり、今のは兩方共模造品である、

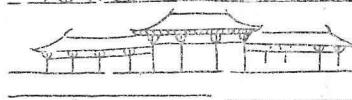
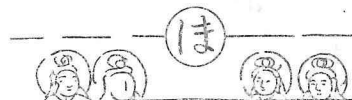
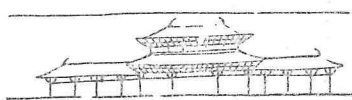
大和・法藏寺  
輪藏 鴉尾



大和・法隆寺王蟲厨子金銅鴉尾



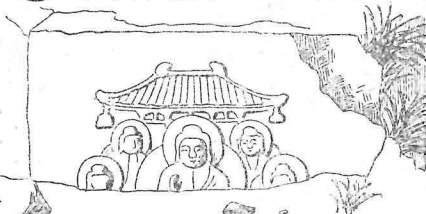
大和・唐招提寺金堂鴉尾



本良・東大寺大佛蓮座陰刻此一部



奈良市頭塔に於ける彫刻の一例



(明治四十一年二月土曜現狀此写生圖)

第六十七圖・鴉尾類  
遺物・繪圖・彫刻  
三〇〇・X

あとは繪・刺繡・記録等にあるので眞物は現在はない。以下例により時代順に説明をする。

飛鳥時代。第六十七圖⑥は玉蟲厨子鷓尾の立面圖である、右上の見上圖はたい寸法を示す丈けに作つたのだから寸尺には合つてゐぬ、左の方の猪の目は、立面圖の向て右手の方の平たいところについてゐた孔で、恐らく我國最古の猪の目であらう、何かの參考になると思つたから序でに出しておいたので、未だ盗まれなかつた時分に、寶藏内の眞物から造つた摺物からそつくり寫したのである。話しは横道へ逸れたが、鷓尾其物は形清秀高雅、後世此れに匹敵する程のいゝものは見出しかねるので、ほんとに眞物は天下一品であつたのを盗まれたのは如何にも惜しいが、幸ひに酷似した模造品があるから、夫れで我慢をしておくよりほか仕方がない。

同圖⑥は原の形がよく判らぬが、同じく飛鳥時

代とみて差支はないであらう、今の有様でも随分大きな重たいものである。

同圖⑥は玉蟲厨子密陀繪の一で、切妻造二重の建築の様に見えるが、夫れは昔しだから描き様が悪いのである。若しこれを切妻造だといふなら、下重も上重も一列に並んだ柱四本で出来てゐるわけである、いふ迄もなく左様な馬鹿なことがありやう筈はないのみならず、同臺座にはもつと遙に立派な、屋上に鷓尾のある建築が澤山に描いてあるから、行くのが面倒なら『法隆寺大鏡』を見ればいゝ。

此所には圖示せぬが天壽國曼荼羅鐘樓(第九卷第一號第一頁參照)の大棟にも、大分に絲が解ほどれかけた、め臙め臙としてはゐるが、鷓尾の乗つてゐる事丈けは確かである、先づ以上が當代の例。

百濟大寺に石鷓尾があつたことは、『大安寺伽藍縁起並流記資財帳』にある左の文で判る、曰く

……(舒明天)十一年歲次己亥春二月、於百濟川側、子部社乎切排而院寺家建九重塔、入賜三百戶封、號曰百濟大寺、此時、社神怨而失火、燒破九重塔並金堂石鷗尾……

山城國宇治郡醍醐村報恩院所藏の有名な過去現在因果經のうちには、入母屋造に鷗尾を上げた圖が澤山ある、嘗て第五卷第三號にのせた第十九圖(一)(二)に例を舉げておいたから参照せられ度い。山城上品蓮臺寺の藏品は其第二卷であるが、複製品でみると同じ様な鷗尾のある建物が多く描いてある。

奈良時代前期のものは、實例は未だ遺物が發見されぬと心得てゐるから、擧げる事も出来ぬ、繪にも恐らくあるまいと思ふ、併し

後期になると、現存してゐて他に掛替のないものでは、唐招提寺金堂大棟西側のものである。大きき完全な完好な代表的なものだから、第六十

七圖の(三)は三方からみた實測圖を掲げておいたから熟覽せられ度い、其寫眞は『文樣集成』第八輯に出てゐる。

彫刻では、東大寺大佛殿内大佛蓮座の線刻に澤山ある(第六十圖)圖でみる通り二重又は一重の中殿の左右に袖がつき、屋根は何れも四注である。或は單層の袖なき獨立せる四注或は入母屋屋根の建物が、水平なる平行線の間によくほりつけてあるが、此れ等の何れにも鷗尾がつけてある。

奈良市上清水町所在、玄昉僧正の首を埋めたといふ傳説——斷る迄もなくそであるが——のあつる頭塔四周の薄肉彫刻に於ても、亦四注單層又は重層鷗尾附の建物を背景とした佛菩薩の群像をみる事が出来る、同圖(四)は今を距る十七年前の紀元節に、私が初めて此等の彫刻をみた記念として寫生しておいた手帳からかきぬいたので、今こそすつかり掘り出してあるから樂に觀る事が出来

るがあの時分は何れもこんな工合に半分位は地中に埋まつてゐたのであつた。此佛殿隅木の下端から風鐸(世)が下つてゐるところ迄刻み出してゐるのは甚だ親切である。

極く小さいのでは、東大寺藏誕生釋迦の灌佛盤周圍の陰刻に、二重入母屋造鷓尾附は建築物がついてゐる。

記録でいふと、『西大寺資財流記帳』のうち、堂塔房舎第二、金堂院の記事に鷓尾の上つてゐた事がかいてある。

藥師金堂一字。長十五丈五尺、廣五丈三尺

蓋上東西、金銅沓形各重立、金銅鳳形各咋銅鐸、蓋上中間、金銅火炎一基、中在金銅茄形、居銅蓮花形、令持於金銅師子形二頭、踏金銅雲形、又宇上、周廻火炎三十六枚、並在銅瓦形、角隄、瓦端、銅華形八枚、桷端金銅華形三十六枚、各着鈴鐸等、又四角各懸鐸、堂扉並

長押、在金銅鋪脱金等、

とある、これは『國華』第三十三號から孫引をしたものである。『大日本佛教全書』のうち寺誌叢書第二に引けるもの亦此れに同じ、但し桷端金銅華形卅六枚が卅六枚になつてゐる。此文中堂扉並長押の「扇」は便宜「扉」に改めておいた、餘計なことかも知れぬが後にまた引合に出すから、此際一寸かいておいたのである。

其他我國に於ける總國分寺であつた東大寺大佛殿の大棟にも、當初のには立派な金銅のが上つてゐた。今のは、先年修理前迄鳥衾とりふすまであつたのを、當初がさうであつたからといふ理由の下に、再び鷓尾にすることに決り、木で骨を組み金めつきをした銅板を貼りつけてあるから、詰り如何様物であるが、昔したのはこんな薄つべらなのではなく、眞の金銅の堂々たるものであつた、此事は既に早く去る明治三十五年二月發行の建築雜誌第一八二

號に、關野貞博士が正倉院文書を引いて委しく述べて居られるから、夫れをみれば判る。短かければ便宜孫引をしていゝが、可なり長いから略しておく。次の

平安時代 に入つても、其前期の平安京大極殿にはあつたのは、今の平安神宮なる其模造をみて知るべきであるが、あれは眞物でないからと疑ふならあれをやめにしても、平安宮址から出た綠色の藥をひいた鷗尾の破片があるので、これは眞物だから動きがとれぬであらう（小川白揚氏著古瓦論 譜第三十七圖参照）

併しこれ丈けの破片では、捉へ所がないから前期か後期か判らぬから後期かも知れぬが、夫れは何れにしても、其平安時代に屬するものなること丈けは確實と言へる。

遺物から言ふと、今私の知つてゐる範圍では、鷗尾はこの邊で跡を斷つたらしい。

ところが

### 室町時代

に入つてから、『鯨』と稱する甚だ奇怪な魚の形で再び現はれるのである、かうなつては最早昔しの脊形の鯨等は全くない、其一例を第七十四圖⑤——此圖は次號に掲げる——に示しておく。此れは先日、滋賀縣技師西崎辰之助氏が、態々寫して送られたもので、長野縣小縣郡浦里村大法寺觀音堂厨子の大棟兩端の鯨の寫生圖である、同氏信書の一節に『別紙見取圖は現場のものに描かせ後小生訂正致したるものに付不完全ながら大した間違はなからんと存候爲念鉛筆とし寫し封入致置候』とあつた其見取圖を敷き寫しにしたのである。此の場合では、鯨其物が例へ大棟の上へ上げてある様な大きなものでないにしても、屋内にあつたゝめ反つて完全に保存され、爲めに大に参考になるのである。

も一つ愛知縣の大恩寺に當代のものがあるさう

で、序でに此の圖も得度いと思ひ、文部省宗教局古社寺調査室の知人に照會したら、實測圖は去年の震災に焼けて了つたから亡いが、この鯨には弘治二年の銘があつた様に記憶してゐる、他に熱田の大王が作つたといふことも確かあつたやうである。尙ほ自分は嘗てこれを五分の一大に描いたが、夫れが今は多分建築學會にあるとの事故、延引してもよければ、後日寫して送らう、といふ返事が來た、幸にいくら遅延しても入手したら其時に追加圖として掲げやうと思ふ。

桃山及び江戸時代の、手元に持合せがないから略しておく、ないから言ふのではないが、新しい鯨なら態々圖を掲げぬでも誰れでも知つてゐるし、また實例も多いから隨所ではほんものを見得るのである。

黄檗宗伽藍の重要な建物の大棟末端には大低鯨がのつてゐる、そして兩鯨の中間に花瓣附の寶

珠が据ゑてある。此等は何れも瓦製であるが、其材料を總て金銅とし、鯨を杢形に、寶珠は二頭の獅子をして支持せしめ、下に茄子形を置いたものにし、其他充分には了解出來ぬが、種々適當の裝飾をなし、も一つ最後に建物の様式を全部奈良時代にすると、往昔の西大寺金堂を再び出現せしめ得る筈である。

\* \* \* \* \*

『三才圖會』には鴟尾と鯨とに左の様な定義を下しゐる。

鴟尾カケ和名久部加太  
今云鳥窠瓦トリノネ  
蚩吻シフ音助勿和  
今云鱗也シシホ  
蚩吻名如字音今云鱗也

昔はさうであつたかも知れぬが、現今では後に述ぶるが如く「鳥窠」は鴟尾とは全く別物である、夫れから同様に鯨は矢張鯨で、蚩吻とは言はぬ、同書に尙此れに就て

頭面如龍身尾似魚而有鱗鱗、蓋此龍子也、俗以

爲繡者甚非也、唯稱蛭吻可也

廣博物志云、龍生九子、其一名蛭吻、好吞爲殿

背之獸、其一名嘲風、好險爲殿角之獸其餘詳見于龍之下

蘇鸞演義云、蛭者海獸也、漢武帝作栢梁殿、有

上疏者云、蛭尾水之精、能辟火灾、可置之堂殿

今人多作鴟字。

五雜組云、鷓於府堂鴟吻上作巢

城櫓及唐僧寺屋根皆安鴟吻、尋常民家不許置之

とある、此等を綜合すると、蛭吻は龍の九疋の子

の一つで、頭は龍の如く、身體と尾とは魚に似て

ゐる、水の精だから火伏せの禁厭になる、だから

殿堂等の屋根に上げておくといふ、城の櫓や寺の

屋根にはこんな次第だから何れも乗せておく、け

れども民家には禁制である、といふ事になる。『工

業字解』にはいろいろの本を引き、懇切に説明が

してある、餘り長いから引くのをやめておく。

我國ではこれ等のまねをしたのであらうが、鯢

といへば名古屋城のを初めとし、城の天守の屋根にはつきものゝ様に思へる、夫れから勿論新しい寺の門又は本堂の屋根にあるが、多くは鬼瓦と混用されてゐる、即ち下に鬼瓦があり、鬼の頭上に鯢がある、次號に述べるつもりであるが、近來の鬼瓦は其面貌が頗る醜怪であるのに、其上の鯢も負けず劣らず魴鱗の化物みた様に刺々の鱗で骨張つてゐるから、見たところ決して快感を起さぬ様な出來榮である。

民家に鯢が上つてゐる例はつい氣がつかぬ、けれども丹波や丹後のある地方の民家の破風に懸魚が下つてゐる通り、どこか田舎の大地主か何かの家には上つてゐるのがあつても知れぬ。

## 第二十二 鬼瓦・鬼板 (上)

大棟又は下棟の末端のおさまりをよくし、兼て裝飾の用をなさしむるため、唐草・雲紋・蓮花紋・獸



面・鬼面等を、若干の厚さと曲線形の輪廓とを有せる瓦當につけた特殊の瓦を其位置へおく、これを鬼瓦又は鬼板といふ。これから追々と述べるが、實際鬼の様な顔をつけたのは割合に新しいので、昔は蓮花紋等が多く、顔をつけても鬼といふよりは寧ろ獸に近く、且つ角も生へてゐなかつたのである、併し茲では便宜上此等を引くるめて鬼瓦と呼んでおく。夫れから其輪廓も前記のものど少しく異り、其面にも「水」といふ字をかいたり紋章をつけたり、或は寶珠・桃實等を厚肉につけたのは、流石に鬼瓦とは言はず、鬼板と呼んでゐる、だからつまり鬼板といへば全部に通ずる次第である、例の『三才圖會』には

方形而裾兩端卷如蕨拳、面作鬼頭、或以木板亦作之、故名鬼板、未知其據、蓋此鴟吻之略乎

とあるが、これには少しく文句がある。

其材料は木か瓦であつて、金屬製のはつい見受

けぬ様である、即ち左の通り

木製。これに二種類ある、

被覆なきもの

屋外に使用せしもの  
屋内に使用せしもの

銅板を以て被覆せしもの

瓦製。

足元あるもの

足元なきもの

(足元の説明は後に譲る)

次に各時代による形の變遷を記してみる。

飛鳥時代、に於いては、囊に記した通り大棟の

末端には鴟尾をあげたとしても、降棟には鴟尾で

は工合が悪いから、何か他のものになければ納

りが悪い、そこでどうしても鬼瓦でなくてはなる

まい。ところが、此時代の鬼瓦が未だ發見された

のを知らぬのだ、次の時代と思はるゝものに蓮花

紋がついてゐるのと、この二つから想像して、當

代の夫れには顔をつけずに、蓮花紋をつけたのであるまいかと思ふのである。

大正六年五月三十日の大阪毎日新聞大和附録には、高市郡飛鳥村大字奥山所在の久米寺同郡白根村大字久米の來米王創始と傳ふる久米寺ではない—發掘の鬼瓦の寫眞を、方凡そ九分位の大きに他に二種の疏瓦と一所に寫眞版として載せ、『推古式瓦發掘』と題し左の説明をしてゐた、曰く

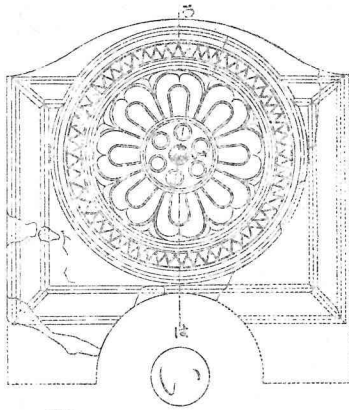
……此程來伽藍跡の發掘を試みたるに鬼瓦一個及び單瓣蓮華模様の丸瓦完全なるもの四個一部缺損せるもの八個及び破損せるもの多數を發掘したり考古家の鑑定によれば何れも推古式にて形體の完全なるにおいて珍品なりと

此文によると考古家が推古天皇時代のものとして鑑定したのだが、疑つてはすまぬが其考古家の名が判らぬ以上、そして寫眞版といふものゝ固より粗な綱目版で而も頗る朦朧としてゐたから、圖から確

かな考へをつけかねる以上、遽に當代のものとして定はしかねるが、其面についてゐる蓮花紋が、夫れど一所に挿圖になつてゐる疏瓦の一面についてゐる蓮花紋とよく似てゐる、そして其疏瓦と同一のものは今京都帝國大學工學部建築學教室の所有品にあつて其瓦を私は今でも此時代のものとして定してゐるから、問題の鬼瓦を當代のものとするには九分迄賛成であるが、實物をみてゐないから、さうであると言ひ切る事は控へざるを得ぬ、併し奈良時代前期を降るものでない事だけは斷言してもいい。此所からは當代の疏瓦や花瓦が澤山出たのだから、若し此鬼もさうだと當代唯一の標本として非常に貴重なものであるのと言ふ迄もない。兎に角此れ及第六十八圖(9)等から推して、當代には未だ顔をつけず、蓮花紋が巾をきかしてゐたのであらうと考へるのである。

而して其面に印した蓮花紋には、子房小さく細

大和・某寺(奈良大學部建築學教室藏)



豐前宇佐 廢彌勒寺鬼瓦(到洋公照男藏)



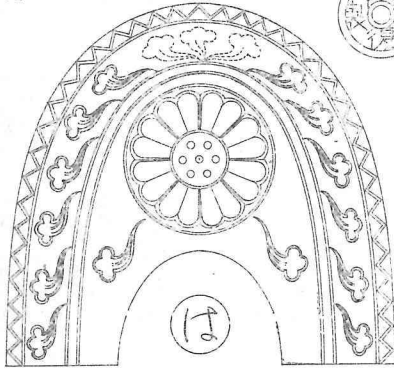
大正五年十月茶口寫生

第六十八圖 奈良時代鬼瓦六種 三三九・六

大正五年十月九日寫生 奈良上村兼次郎氏藏

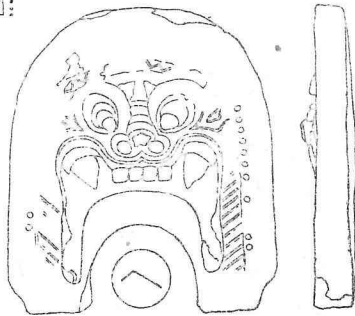


大和・某寺鬼瓦

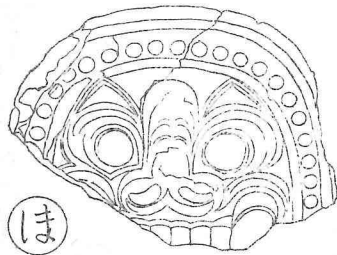


奈良・王井久冷郎氏藏鬼瓦破片復原圖

明治四十年四月四日寫生



奈良・東大寺講堂址出土鬼瓦



奈良・興福寺鬼瓦(小澤巖藏氏藏)

長にして單瓣のもの、子房大にして瓣面廣潤復  
瓣のものとの二種が最も多かつたであらう、其他  
の異形のものとは比較的少なかつたらう、そして其  
様式は、其建物の軒先に用ひられた疏瓦の瓦當の  
蓮花紋と一致してゐたらう。そして其輪廓は大體  
第六十八圖㉔の如く、上端にだけ波浪線をもつた  
ものであつたのではあるまいか。私は當代の鬼瓦  
を以上の如く考へてゐるのである。

奈良時代前期にも蓮花紋のあつたことは、前記  
奥山久米寺のがさうかも知れぬし、若しこれが一  
つ繰り上つても、尙第六十八圖㉔に實例がある、  
此場合には子房の中央は蓮實の代りに孔があいて  
ゐるから、恐らく内側から銅又は鐵の針金の先を  
曲げたので引かけてとめたのであらう、或は長い  
釘で打ちつけたかも知れぬ、此の瓦は完全でない  
から判りやすくする爲め全形を點線で復原したも  
のをかいておいた。其子房は含まれたる蓮實、瓣、

並に其中央の卵隆起の周圍に何れも輪廓があり、  
最外廓に鋸齒紋帯のあることは當代の一特徴であ  
る、だから銘文もないし他に證據とては一つもな  
いが以上の特徴及び瓣の様式等からこれを此時代  
のものとして推定したのである。

當代になると顔をつけたのが出来たらしい、其  
顔は昔しの四天王や仁王の腹帯の中央についてゐ  
る獸面によく似た面相である、其一例は同圖㉕で  
これも同じく眉間に孔があり、分厚な大變に重い  
もので、棟へのとめ方は多分㉔と同一の方法であ  
つたらう。他の例は河内の道明寺から出土したもの  
で、これよりは幾分形もよろしいが、先づ大し  
て甲乙はない出来榮である、要するに當代の顔は  
餘り立派でないことだけは確かであらう。

同後期になると、同圖㉖・㉗・㉘及第六十九  
圖㉙の如く、蓮花紋と雲紋と合したものも出来、  
また顔の恰好も中によろしくなつた。㉚は以前奈

第六十九圖 奈良平文時代の鬼凡五種

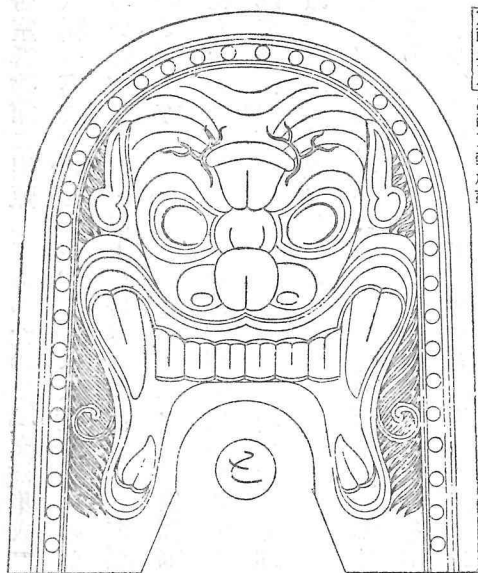
文獻集成 第四十輯所載



京都附近  
東大工學部藏



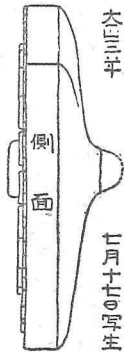
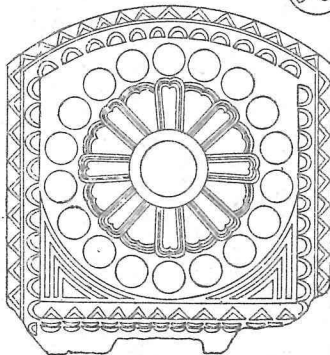
古風所載  
平安城鬼凡



東京住人白石村冷氏藏……傳東大寺鬼凡  
京品は僅に一部を殘存せるのみ、其上三つに破れてゐる。其写真は文獻集成 第八輯に出てゐる。こには判り  
易い様に復原圖にて置た…

ぬ

明治四十三年六月四日學生 岡山縣吉備郡箭田村 二二九番 四



大正三年

七月十七日學生

奈良縣生駒郡都跡村・唐羅寺鬼凡  
不詳複製・大正十二年九月十日

岡山縣吉備郡箭田村……吉備寺鬼凡

良帝室博物館に出陳してあつたので、『文様集成』

第八輯へ寫眞をのせたが、こゝへは復原圖をのせておいた、ところが頂上に於ける雲紋の納りが悪いので、仕方なしに三つかためてみたが、實際斯様にしたかどうか、どうせ「鳥衾」が引かゝるので隠れて了ふのだから、何にもつけなかつたかも知れぬ、だから點線にしておいた。

㉔も眉間に釘孔がある、そして顔面全體に渦紋のあるのは、頭髮や鬚を現はすと同時に威嚴を示してゐるのであらう、丁度野蠻人の入墨の様である。此種類は山城・大和に相當にあるから敢て珍らしくはないが、完全なのはめつたにない。㉕・㉖・㉗は何れも同意匠である、其内㉗が最大最美で、其立派さに於いては此右に出づるものはあるまい、これは三つの不完全な破片があつたのを、明治四十年頃唐招提寺講堂の鬼瓦を計劃する際に、斯様に復原して用ひたのでこゝには其の復原圖を掲げ

たが、寫眞は同じく『文様集成』第八輯にある。

面相は此時代が一番立派である。

平安時代前期 になると、私は多く實例を知らぬが、同圖㉘・㉙等は其時代のものであらう、大體前時代の如く、たゞ少しく形がくづれて來るのである、鬚も眉も頭髮も其先が蝸牛屬の身の如く螺旋形に卷いてゐる傾向がある、併し當代鬼瓦の總てがこんなかどうか未だ研究してゐない。

㉚の蓮花瓦亦此時代のもの、開花蓮も左して立派なものではなく、周圍の珠紋は大に過ぎ、中央子房内の實は唯一個で此亦過大である、全體の輪廓及び其輪廓に沿へる半月紋鋸齒紋とは、何れも感服出來ぬ形であるが、今のところ唯一の例であるから甚だ貴重と言はねばならぬ。大棟(又は降棟)への留め方は、側面圖で見る通り、裏面中央の適當な部分を適宜に撮み出して孔を穿ち、後ろから金屬の先を曲げたもので引掛けたか、又は針金を経

つたものを通して輪にして、しつかりと括つたのであらう。此瓦の寫眞が必要なら『文様集成』等四十一輯を見られ度い。

同、後期、と思はるゝ⑤は、持合はせが唯一つだから、大して参考にはなるまいが、無いよりはいい位のところで我慢するより仕方がない。此は傑作とは言へぬが、左りとて決して鈍作では勿論ない、だから當代に於いては普通品であらう。

### 第七十三圖

⑤(左中央・此圖は次號に掲げる豫定)は法勝寺のもの

傳へ、京都府立第一高等女學校の所有であるが、同校教諭源豊宗氏の厚意で圖示し得たのである、此れは様式から觀るに、當代とすれば極く末期だし、鎌倉なら極く初期である、際どいところであつて、無責任の様だがどちらでもいゝのである。

京都には當時『勝』の字のつく寺が六つあつたら、引くるめて『六勝寺』と呼んだのは誰でも知つてゐる筈であるが、甚だしいのはさういふ名の寺

だと思つてゐるらしい、そんなのは百人に一人としても、六勝寺の名を一つ一つ問ふと返事の出來ぬのが多い様である、序だから其名を並べておく事にする、即ち法勝・尊勝・圓勝・最勝・成勝・延勝の六寺である。其法勝寺は、白河天皇の勅願寺で、京都岡崎公園の東に位置し、規模の大なる奈良の東大寺に亞ぎ、治安二年藤原道長が費用お構ひなしで建立した有名な法成寺よりも、莊嚴遙に華美であつたといふから大したものだつたに違ひない其落慶供養は承暦元年で、其後も堂塔盛に建立せられたが、遂に康永元年三月二十日、大塔・講堂・阿彌陀堂・鐘樓・經藏・總社・南大門・步廊等悉く焼けて了つた、後再興を計劃した坊さんがあつたが出來ず、寺は退轉したのである、だから寺址からは康永以後の瓦は出ぬとみてよからう、其上、ごつちかといふと、堂塔の建立されたのは多く平安後期であつた、旁此鬼瓦は當代末期とみて差支あ

るまいと思ふ、尤もこの後の方の議論は、此瓦の出所が確實とみての話して、法勝寺址出土か何か判るものかと疑つては駄目な事いふ迄もない。此瓦は山口高商校長横地石太郎氏の元所藏品であつたさうだから、出土地に間違のないものとして數百字を費したのである。

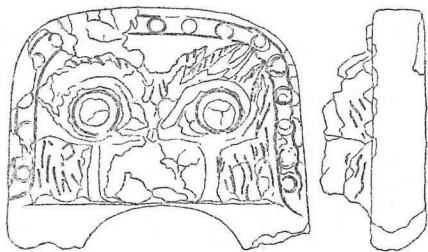
先きにも引用した小川白楊氏著『古瓦譜』第三十六圖に、平安京鬼板破片と稱する珍らしい寫眞が載せてある、夫れでみると原形は大分に大きなものであつたらしく、全く想像であるが、中央には何か——満開の所謂寶相花かも知れぬ——模様があり、周圍には寶相花唐草の如きものを薄肉に現はしてある、其外側には相當の巾さの論廓を廻らし、尙其外は普通なら珠紋があるのであるが、此場合はどうなつてゐたか、缺けて亡いから全く判らない。此破片は僅に下の方一少部分だから、到底全形を推測し得ぬが、夫れでも此部に残つてゐる

唐草でみると、洵に優美でよく時代を現はしてゐると言へる。瓦の地は丁度小さいけすぢぼう(立毛筋)の様なもので隙間なく疵をつけてあるが、此れは多分獅子口(出後)のあるもの、様に、面に白漆喰を塗つたのであらう、さうすると瓦面の唐草や輪廓や珠紋等が、恰も獅子口の綾筋(出後)や巴紋様に判然と浮び出すから、棟へ上げて至極明瞭に見え、定めて美事であつたらうと思はれる。珍奇な例としてこゝに紹介しておく。

鎌倉時代、に屬するものは相當に遺物もあるし現在屋根の上にあるのも可なりある、其内の數種を第七十・第七十一圖に出した。(お)は河内の廢西琳寺(南河内郡古市村)ので、破片ではあるが其面に横向きの蓮花紋が陽刻してあるのは甚だ珍らしい、瓦も極小さく且薄いから、建築の屋根にあつたものと思はれるが、此れあるが爲め、少なくとも當代迄瓦當に蓮花をつけた事が判るから、至極貴重な標本

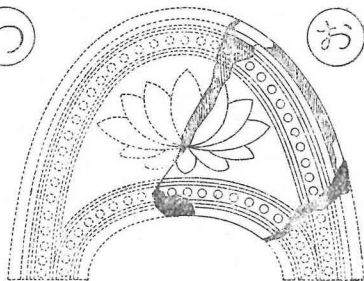


# 第七十圖 ●●● 鎌倉時代鬼月六種



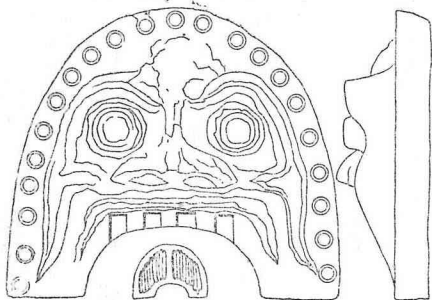
大和・高市：慶定林寺（大正三年十一月十七日写）

わ

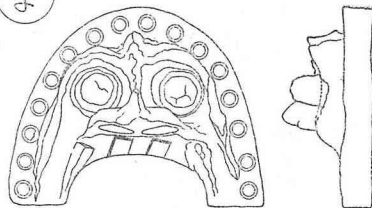


お

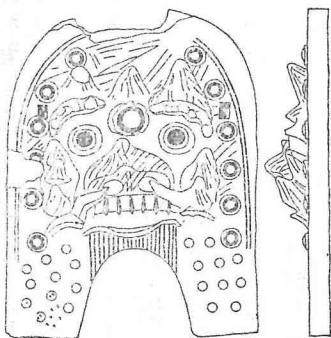
河内：慶西琳寺（家藏）  
（大正十二年六月二十五日復写）



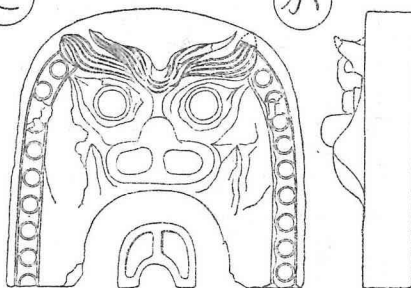
ふ



大和：唐招提寺鼓樓：左・二ノ鬼（大正二年七月十六日写）：右・一ノ鬼（大正二年九月六日写）



た



か

和：華師寺東院堂大棟（尙在）

大和：嵯麻寺西塔（大正二年六月二十六日写）

不詳複製二二六三〇



と言はねばならぬ。

其他の五種は何れも顔面がついてゐるが、かうなると最早獸面ではない、去りとして所謂「鬼」でもない、即ち餘り美しからざる顔といふより仕方があるまい。此内第七十圖④は定林寺址(奈良縣高市郡高市村大字立)から出たもので、後暫く法隆寺南大門修理事務所に置いてあつた。私の寫生はそこにあつた時したのである。此瓦今行衛不明である。定林寺の出來たのは飛鳥時代であるが、廢亡の時は分らぬ、併し今は知らぬが先年こゝで室町時代に屬すと認めらるゝ花瓦の完全なのや破片やが澤山に落ちてゐたのをみた、そして其何れもが火にあつたゝめ焼けてゐたので、私は此等は先づ大體に於いて室町時代の頃迄存續してゐたのであらうと推察したが、斯様な次第だから鎌倉時代では、寺はまだ可なり盛であつたらう、だから其時代に堂が建てられたかも知れぬし、修理されたかも知れぬ、故に

様式上此時代の瓦があつても少しも不思議はない筈である。

④は當麻寺西塔のもの、この塔は建保七年——建保七年卯月七日の文書が柱頭即ち寶珠内から出た、同年四月十二日承久と改元されたから、これは建保としては現存せる最後の文書かも知れない——に大修理があつたが、此鬼は疑ひもなく此時に造つたものである。⑤は唐招提寺鼓樓の『一の鬼』と『二の鬼』とである、圖でみる通り一は二に比して大分に小さい、これは稚子棟ちこむねが小さく且つ背も低いから、従て其末端にある『一の鬼』は、普通の大きさを有する隅降すみくだり(棟)の終についてゐる『二の鬼』よりずつと小さいのは當然である。前號第六十五頁第六十圖④の右端に、この隅降棟や稚子棟の名稱を記入しておいたし、夫れ等の末端に鬼瓦がついてゐるところも現してあるから一應御覽を願ひ度いが、圖が大變に小さくなつて了つたの

で見憎いのは甚だ遺憾である。此建築は棟木の下端に一行に『仁治元年<sup>庚子</sup>七月二十日<sup>云云</sup>』の墨書があるので年代は明らかである、従て此等の鬼も勿論此時のものとしてよろしい。序ながら此建物は鼓棟と言ひ傳へ、今でも其名で登錄されてゐるが、太鼓なんか下げる設備はまるでないから、これは經藏であつたのであらう、そして今これと相對せる鐘樓はあの通り貧弱であるが、當代には恐らく此れに釣合ふ様な立派な建物であり、南大門も中門も歩廊も東西塔婆も西室も北室も皆揃つてゐて定めて堂々たる構へであつたのであらう。

(㉞)は藥師寺東院堂大棟のであるが、これも嘗て(㉝)と同じものへ出した寫眞の方でなく、も一つの方を描いておいた、だから第四十一輯のごこれと兩方觀ると、つまり東院堂大棟兩端の座ながら知る事が出来る。ごつちも負けず劣らず變なものだが、まああの方が幾分よろしい、これは顛頂眼

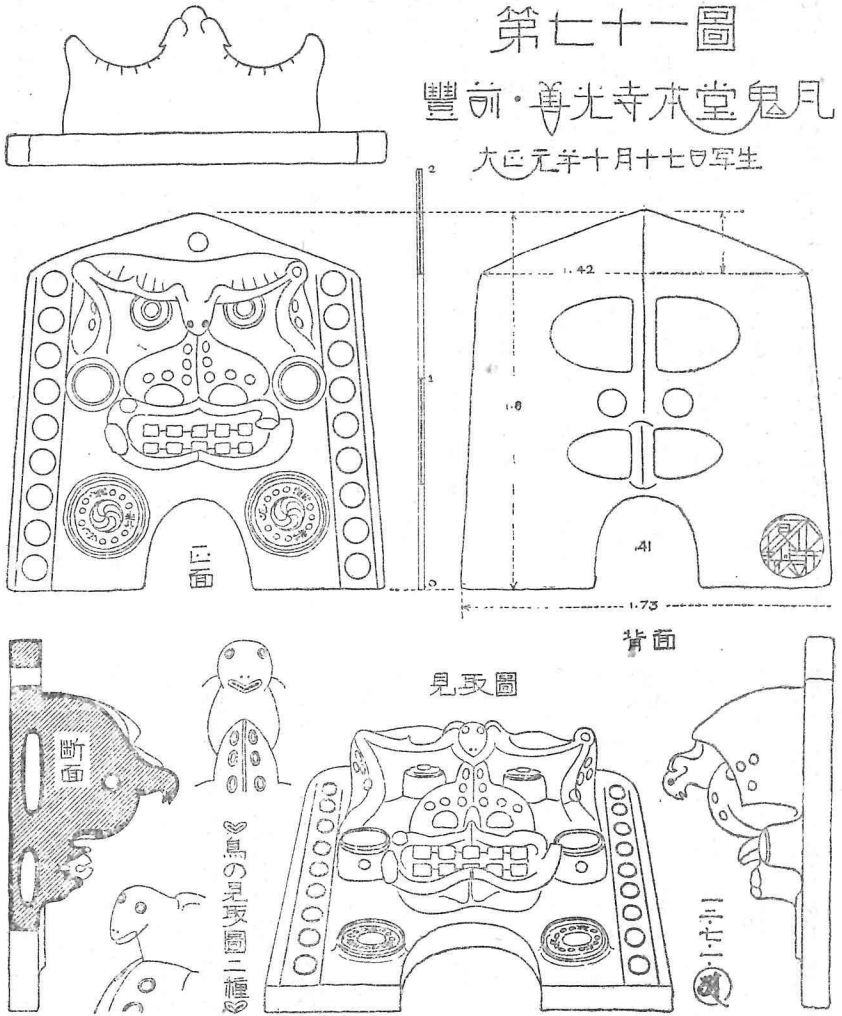
が、少しく前方に移轉して眉間に現はれた、め、純然たる三つ眼となり、耳と思はるゝところは長方形の孔があき、兩頬及び前額には角質の隆起が澤山に出來てゐて、全くの化物になつて了つた。

以上五種を通覽するに、瓦は厚い平たい全部質質より成る一枚のものであることは前時代と同一なるが、其上についてゐる顔面は、全體として前時代より少しく前方へ出てきたのである、即ち第十九圖迄のは、間々示してある側面圖で判る通り何れも割合に平たい、で第七十圖のも、(お)なる蓮花紋のを除いては、夫れ等程に平たくないのである。そして其特徴としては、(一)眼は眞圓で突出せること蕎麥饅頭の如く、(二)鼻は所謂獅子鼻で胡坐をかき、(三)口のある場合には門齒や犬齒の並び方行儀が悪く、(四)周邊の珠紋は手頃の竹筒で型を押して環形に凹したのが多い、そして(五)時代が降るに連れ顔面に奇怪にして醜惡なる角質

# 第七十一圖

## 豊前・善光寺本堂鬼凡

大正元年十月十七日写生



の隆起を生じ、最早奈良時代に  
見る様な優秀な  
もの等は薬にし  
度くもない様  
なつて了つた。

第七十一圖は  
豊前善光寺本堂  
大棟の鬼圖であ  
る、當代のもの  
としては甚だ珍  
らしい形で、其  
輪廓は將棊の駒  
の如く、前額が  
薄くなつて眼や  
鼻を覆ふ様に前  
方に飛び出し、

其中央部は鳥に變形し、鬼の上方に反轉せる鼻は此鳥の胸に接し、鳥の兩翼は眉に連り其一部をなしてゐる、そして醜い口内上下顎よりは門齒を粗生し、犬齒は其意味を全く失つて形式的となり(但し全部缺損してゐる)、下顎の下方には中央に巴紋、周圍に三個づゝの珠紋、及び其間に寺號なる善・光・寺の三字を陽刻し、兩頬には圓い隆起があり、そして周圍の珠紋は尙且竹筒の型押であり、他に鼻や頬や眉等に小さい圓形が細い竹筒の先で押ししてある。そして眼は同じく蕎麥饅頭である。

此れ位の變物は恐らく他に類例があるまい、側面断面及び上から見下ろした圖でよく判る通り、顔は思い切り前方に出てゐる。

そこで初めからかいた事を引くるめてみると、次の様にいつて差支あるまい 即ち

鬼瓦は、昔しは地の瓦は一枚板で、其面には蓮花紋・唐草・獸面等をつけたが、蓮や唐草は勿論の

こと、平安時代迄は顔でも割合に平たく、餘り前方に突出せず、角も生へてゐなかつた、そして周圍の珠紋も一々半球形に盛上つてゐた、ところが鎌倉時代からは、蓮や唐草は少なく、多くは顔をつけ、今迄よりは大分に前に出る様になり、稀れには異形にして異常に飛び出したのもあり、且つ額上一對の角の前驅として、顔面に不規則に角質の隆起を生ずるに到つたのである。と。

尤も天部の腹帯の中央の裝飾として、獸面がついてゐる事は前にも一寸書いたが、東大寺法華堂内乾漆の中に——確か西南天と記憶してゐるが、確かりしない、次回好機を得て再び拜觀の上、誤つてゐたら其時訂正をする——立派に二本の角を生やしたのがある、だから二本の角は奈良時代からあつたのであるが、これは天部腹帯の飾金具ともいふべきもので、右に記したのは鬼瓦に就てのことである。(大正十三年五月三十一日稿)

\* \* \* \* \*

前號正誤表

頁段・行 誤

五九 下・一 重要なる

六二 上・一〇 頗る適し

六三 下・一六 建築家の頭

六四 下・一一 八圖の③から

六八 下・七 さなる

七二 下・四 麟・麟

七八 下・一〇 左側二つ目

八一 下・二 あるが、

八三 上・一九 左の十九行

正

重厚なる

頗る適し

建築家の頭

八圖の③なる

さある

麟・麟

左側一つ目(地藏院)

あるが、京

左の十七行

紹介

宋末の提舉市舶西域人蒲壽庚の事蹟

文學博士 桑原隲藏著

本書は桑原博士が永年研鑽せらるる東西交通史に關する一大研究論著にして、其の題名は右の如し。雖も、其の内容より謂へば實に附記せる通り唐宋時代に於けるアラブ人の支那通商史に謂ふべきものなり、本書内容の骨子となるべきものは嘗て大正四年より七年に亘り「宋末の提舉市舶西域人蒲壽庚に就いて」と題し史學雜誌上に公にせられたるもの、之に更に燃犀の史眼を以て幾多の増補訂正を加へ此の大論著をなしたるなり、著者が學に忠に、一史料に雖も苟くも引かず、入念根本的に之を探り、一一史料としての價值批判を加へて而して後に論據を以て使用せらるるは斯學に志す者の夙に熟知する所、本書に於ける研究は其の些細の事項に關するも反覆考覈を加へ、疑はしきものは疑しき明言し、確實なるものは